

子どもも教師もやりたくなる授業づくり②

－ 3年生のフラッグフットボール

・ 4年生の跳び箱実践から学ぶ－

研究部長 楠橋佐利（豊能町立吉川小）

1. 第2回の支部研究部例会について

昨年度から「子どもも教師もやりたくなる授業づくり」というテーマで研究を進めてきた。このテーマになって2年目である。昨年度の1回目の支部研究部例会資料の冒頭で研究部の活動について次のように書いている。

「限られた研究部の例会や会議等で十分学びを深めたり、実践を集団的に創造したりしていくことは難しいことです。ましてやますます多忙化する現場の中で、研究部のメンバーもふくめ『何かを明らかにしていく例会』は敷居が高く、それより『そこへ行けば授業や教育について何か学び取れたという実感のある例会』の必要性も感じ、研究部例会の刷新に取り組んできました。つまり、『研究テーマを意識はするが、取りあえずやってみた実践を大切にしていく』とか『テーマを深めるのに聞いておきたい話を講師を呼んで聞く時間をとる』などです。」

さらに「『自分がこれからやる』授業を素材にし、先行する実践例などから学びながら『計画－実施』していき、『実践報告』という形で例会にのせる。そのことで総合的（一つ一つは深くないが）に『教材について』やその背景としての『文化論的視点』、さらには『子どもの捉え方』等を学んでいけるような支部研究（例会）を目指したいと考えた。そして、このコンセプトで、昨年度から全4回にわたって支部例会が行われた。若い会員、ベテラン会員共々実践を通して交流したいと考えた。

今回の実践は、昨年度に続き、研究部員である中村俊介先生のフラッグフットボールと、研究部員ではないが、中河内ブロックの窪田先生の跳び箱実践である。

昨年度は、「ひとまずやってみて、その意義を問う」というある意味「大阪らしい」特徴（やってから考える）が出ていたように思われる。そして、何よりもどの参加者も例会の内容に参加できる、という筋道が「実践を通して考える」というところからできていったのではないかと思われる。今年度も継続して「実践を研究の土台にのせる」というやり方で研究を進めていこうと考えている。

2. 中村フラッグフットボール実践（3年生）

中村先生の実践は、昨年度の5年生での実践に引き続き3年生を対象に行われている。まだ途中での報告になりますが、昨年度にやり残したことに再度チャレンジしたい、さらに「次の一手」へのヒントをつかみたい、という気持ちでの報告である。

事前の研究部会議の討議では、安武氏が以下のようにコメントしている。

〈安武氏コメント〉

中村さん自身が最後に書いているように、フラフトのおもしろさである「相手をだますこと」が「わかっていたかということそうではないと思える」のはなぜか？もし「フラフトのおもしろさ」＝「相手をだますこと」であるなら、一番の「特質」であるところを味わわせることができなかつたことになる。それはなぜか？実践は、インベーダー（しっぽ取りの感覚づくり）3時間、パス3時間、ハン

ドオフ2時間、オリテと総合ゲームに1時間ずつである。つまり、パス3時間とハンドオフ2時間が実技を伴いながら「フラフトを教えた時間」ということになる。時間の少なかったことはここでは問わない。この計5時間で「面白さが教えられなかったのはなぜか？」を分析してみる必要があるかと思う。

⑦なぜ、「パス」から入ったのか？「だますおもしろさ」を教えるのに「パスから…」は有効なのか

⑧「パス」の後に「ハンドオフ」を持ってきたのはなぜ？

3. 窪田跳び箱実践（4年生）

窪田先生の実践は、「一瞬を一瞬で終わらせない跳び箱の指導」と銘打っての実践。跳び箱を単技の表現としてではなく、連続技として表現できないかという考えを持ち、「つなぐ」ためにどうすればよいかを子どもたちが考え、「ひねり横跳び越し」というとび方を導き出している。また、方形マットに跳び箱を置くという先行実践から、つなぎと連続技を意識して子どもたちと学習を進めた。しかし、「跳び箱としての教育内容は？」と問うた時、どのような答えが返ってくるのか…。その点も含め、参加者で検証していきたいと思う。事前に研究部会では、次のような点が話題にあがった。

〈研究部会議から〉

・「跳び箱ってどんな運動か」という問いから出発して、実践の最後で子どもたちに再度問いなおすと（窪田）

・「一瞬で終わらせない」部分への窪田さんのこだわり。そもそも、学校で跳び箱をするのってどうなのか…という思いになった。（朝輝）

・ねらい「グループで音楽跳び箱」について

これまでの自分の実戦でも、技ができたできなただけに終始してしまっていたが、窪田実践では「表現の楽しさ」に子どもたちが気づいたのかなと思った。（古川）

・子どもたち自身が表現を楽しむということがどういうこととしてとらえているんだろうと思いました。どこで子どもたち自身が「表現した」ということがわかったんだろうなと思いました。（中村）

・「いい実践」で終わらせないのが良かった。音楽マットとの繋がりが良かった。自分の小学2年生実践ではマットと跳び箱とをつなげるという発想がなかった。

滋賀大会で、交互に飛んでいくという実践があったが、窪田実践は跳び箱がたくさんあったので、難しさは感じた。（大西）

・①「表現の幅を広げる」について、跳び箱における表現を広げるとはどういうことなのか？特に、今回はマットも入っている。総合的な器械運動としての表現になっている点をどう考えるのか？②「発問で技を引き出せる」（実践前半）ことと、「後半の表現を広げる」という二つの実践特徴があるのかなと思う。窪田さんが「やってて楽しかった」ということ理由は？今回の窪田実践にはいいところがたくさんある。「概念崩し」「言葉での指導」「7時間目の子どもたちの感想」は成果としてしっかりまとめて欲しい。（安武）

・学習の進め方としての発問を中心とした指導法は良かったという論議になった。それによって、「子どもたちが楽しめた」要因になったと考えることができると思う。マットは盛り上がったが、そこに関連させたらどうか？（楠橋）

上記のコメントなどを手掛かりに実践検討を進めていくこととした。